

《論 文》

台北高等商業学校研究 関係資料改題

—— 2012年収集を中心として ——

渡 辺 邦 博

1. はじめに
2. 台北
3. 台南
4. 屏東ならびに高雄
5. 再び台北
6. 小括

キーワード：台北高等商業学校、台湾総督府、台南新報、二峰圳、

1. はじめに

筆者は、2012年1月から4月まで、中華民国外交部 MOFA の奨助金により、台北高等商業学校に関係する在外研究の機会を得た。その後、2015年にも助成を得て、それについての報告は既に公表した。今回は、順序が逆になったが、2012年の調査で収集した関係文献の報告を行い、貴重な機会を提供して頂いたことに対する義務を果たしたい。

暗中模索で到着した台湾では、まずは滞り場所と研究の実質的な指導をどこに求めるかを確保することが重要であった。MOFA 外交部は、諸手続きを行った台湾國家図書館 National Central Library に隣接する

ところにあり、図書館最上階に研究個室を用意することをはじめとして、各種の助言を提供してくれたが、結局中央研究院の林玉茹先生を紹介してもらい、台湾全体のどこを回れば良いか見当をつけることができた。

猫に小判であるが、林先生からは、九州産大の紀要に掲載された経済史関係のご論文¹を頂戴して以来、直接お話を聞かせて頂くこともでき、特に台南は彼女のホームグラウンドのようで、当該地の調査場所、人脈にとっても役にたつ情報を頂戴した。

2. 台北

台湾日日新報

『台湾日日新報』は、旧日本統治下の台湾を代表する新聞で、事件事跡に関する同時代資料である。1901年（明治34年）11月から、8面のうち2ページを中国語版とし、1905年（明治38年）7月からは、『漢文台湾日日新報』の名で4ページの独立した新聞を発行した。だが、1911年（明治44年）には財政困難の理由により、日本語版の中に2ページの中国語版を付す姿に戻され、この中国語版も1937年（昭和12年）4月には、廃止された。

太平洋戦争の激化に伴う報道統制により、1944年4月1日に総督府が当時の他の主要日刊紙である『興南新聞』（本社・台北、『台湾民報』の後身）、『台湾新聞』（同・台中）、『台湾日報』（同・台南）、『高雄新報』（同・高雄）、『東台湾新聞』（同・花蓮港）の5紙と統合させ、『台湾新報』（新）とした。発行部数16万7000部であったとされる。日本の敗戦後は『台湾新報』（新）は国民政府により接收され、『台湾新生報』と改称された。

1 林 玉茹著・朝元 照雄訳「植民地時代台東の資本主義化と工業化の推進 ～～台湾拓殖会社の投資事業～～」九州産業大学経済学会『エコノミクス』16/1、2011年9月79-143ページ。

これは、近代台湾史を追いかける場合の重要な資料であり、冊子版は主だった図書館で閲覧できる。さらに、デジタル化もかなり早い時期から行われていて、記事検索が便利であるが、それだけに、読み取りがなされた画像が荒くて、判読するのが苦しい面もある。

私は、近代台湾史の基礎資料と理解して、台南高商、総督府高等商業学校関係の記事を検索した。²

台湾総督府職員録

台南高商も、総督府付属高等商業学校（後の台北高等商業学校）も官立であったから、それに関する情報は、この総督府職員録にも見出される。「高等」が付される以前の商業学校まで遡り、関係情報を追跡した。

大正8年以降のスタッフリスト表を作成する必要性を感じたので、以下の年次を閲覧複写した。

大正8年 = 1919年	商專 設置	大正13年
総督府高商		
大正9年 = 1920年		大正14年
大正10年 = 1921年		大正15年
大正11年 = 1922年		昭和2年
大正12年 = 1923年		昭和3年

國家図書館には、学位論文コーナーがあって、台北高等商業学校を研究主題としたものもある。日本流に言えば修士論文＝碩士論文の中に一件を見つけた。

これは中国語で書かれたもので、細かいところは理解できないが、コ

2『臺灣日々新報』以外に、『台南新報』、『台湾民報』も閲覧した。

ンパクトにまとまった好論文のようで、私が日本で参照した、横井香織論文と甲乙つけ難い内容である。³

ローカルな新聞記事を追跡していると、本来の関連記事だけでなく、日本語で記述されているだけに自ずと関連する記事以外にも目が及び、この時代はなるほど、私が日本史で勉強したあの時代のことで、その時代の日本人がこの地でこのように活動していたのだと、改めて考えさせられる。そうした中で、『台湾日日新報』など以外の新聞の存在にも関心が及び始める。

3. 台南

台南市に短期間だが存在した官立の「台南高等商業学校」のことも、出発前に少し情報を仕入れていた。これについては、藤井論文を予習した。⁴ また、シニカの台湾史研究所で林先生にお会いし、その後若干の時間を費やして、台南にでかけ、成功大学⁵、国立歴史博物館、台南市立図書館などを示唆して頂いたが、台北ではその準備を行った。

『台南新報』（大正 10 年 5 月～昭和 12 年 1 月）

『台湾日々新報』を閲覧していても、台湾以外の閲覧者が少なくないこともあろうが、閲覧者の数が推測されるほどの資料の状態に、辟易とも言える印象を持ったが、この『台南新報』の場合は、正直なところ、

3 横井香織「日本統治期の台湾における高等商業教育」『現代台湾研究』23、2002 年参照。黒崎碩士論文「台北高商の研究」

4 藤井康子「1920 年代台湾における台南高等商業学校設立運動」『日本の教育史学』48、2005 年。

5 1931 年 1 月 15 日旧台南高等工業学校設立、機械工学科・電気工学科・応用化学科設置。

1940 年 3 月 30 日電気化学科設置。

1944 年 4 月 1 日台南工業専門学校と改名、土木科・建築科設置。

戦後

1946 年 3 月 1 日中華民国に接収され台湾省立台南工業専科學校と改名。

印象が別であった。復刻されたのが新しく〈2009年6月〉、その技術にもよるのであろう。再生状態が大変良好で、閲覧の疲れが少ない。また、1947年以降長きにわたって台湾が経験した不幸な事情もあっただろうが、よくぞ生き延びたと思われる。過酷な条件を切り抜けてほとんど欠落なく保存された原本に是非お目にかかりたいと思っていたが、帰国前によりやくそれが可能となって、4月7日台南市立図書館の地下書庫に入庫の機会を与えられた。

短時間ながら、復刻に際してそのベースとなったであろうオリジナルの新聞を閲覧できて、時局に耐えて生き延びた版本をしみじみと検索することができた。想像以上の良好な状態で驚くとともに、この綺麗な保存状態があればこそ、あの立派な復刻が可能だったろうと、思いを新たにした。

台南では、林先生のご紹介で、成功大学、国立歴史博物館にいく人かの研究者と交流することができたが、日本の旧台南高等工業学校の同窓会報を付属図書館で閲覧し、成功大学の校史館では、成功大学の歴史関係書籍、台南高商から台南高等工業学校への移行に際しての校地問題を研究する祭氏の論文を頂戴した。⁶

成功大學校史関係図書

成功大学だけではないが、台湾の大学はほとんどの場合校史館を持っていて、第二次世界大戦終結以前からの各大学の歴史を広く深く公開している。旧日本の台南高等工業学校を前身に持つ成功大学にも、図書館と校史館で各種の資料を収集した。

まず成功大学史関係では、以下の文献を頂戴した。

高淑媛 「成功的基礎――成大的臺南高等工業學校時期」 成大博物館、

中華民國 100 年 11 月。

高淑媛 『頭冷胸寬腳敏：成大早期畢業生與臺灣工業化』 國立成功大學、
中華民國 100 年 11 月。

祭孜姿・陳恒安 『不安於室 --- 成功大學的人文景觀』 國立成功大學、
中華民國 100 年 11 月。

王健文・張幸真 『南方歌未央：戰後半世紀的青春記事』 國立成功大學、
中華民國 100 年 11 月。

校史編撰小組 『南方歲時記 --- 成大八十年編年記事圖錄』 國立成功大
學、中華民國 100 年 11 月。

特に第一の『成功的基礎』には、臺南高商と入れ替わりで、高等工業
学校を設置する財政事情が、公文書、新聞などを援用しつつ、詳述され
ている。pp.22 - 33.

6 台南高等工業学校同窓会『台南高等工業学校五十年の歩み』 昭和 56 年 7 月、開
校 50 周年記念事業企画委員会、東京三鷹市。99 ページ。

台南高等工業学校同窓会「六十周年記念鳳木會會報特別號」平成 3 年、27 ページ。
台南高等工業学校同窓会『鳳木会名簿』、1992 年。12 ページ。

< 帰国後、別の機会に入手した、鳳木会の機関誌『鵬翼はるか』平成 2 年 7 月 20
日、野村透出版、が私の手元にある。>

蔡侑樺、「1929 年至 1934 年間臺灣總督府臺南高等工業學校的校園規劃與建設」
60、台南高等工業学校同窓會。祭氏はまた、下記のような大規模調査にも参加し
ていて、その大部な報告書も頂戴した。

『台南縣縣定古蹟 原「台南水道」委託研究調查暨整體規劃』中華民國九十四
年三月。

そこには、今ではかなり知られるものとなり、私たちも数度かにわたり訪問し
たこともある、台南市官田區嘉南里の烏山頭水庫が、八田與一以前に遡る日本の
技術史との関連で調査対象となっている。

また、林先生からご紹介頂いた成功大学のスタッフ陳先生からも以下の文献と
情報を頂戴した。

陳文松「『校友』から「台湾青年」へ --- 台湾總督府國語学校『校友会雜誌』に
見る「青年」像 -」年報『地域文化研究』第 9 号 2005 年

また、陳先生から、岡本真希子『植民地官僚の政治史 朝鮮・台湾總督府と帝
国日本』三元社、2008 年 2 月刊という重厚な書物を紹介して頂いた。

台湾歴史博物館

台北市南海路には国立歴史博物館があって、郊外にある有名な故宮博物館、台北中央駅近傍の国立博物館と並んで、重要な施設であるが、台南では、創設間もない台湾歴史博物館を訪れ、館員の面々に私の関心を告げて、各種のアドバイスを頂戴できた。台湾歴史博物館は、台北の国立博物館とはまた異なり、民俗学的、地域歴史的視点から建設されたと思われるが、附属の資料部門にもアクセスできて、複数回訪問した。ここでは、作業が進行中の『日刊臺灣民報』の復刻作業からできた、1932 年 4/15-5/31 のデジタル DVD を頂戴した。

『臺灣日日新報』の場合に判読に苦心する点にはすでに触れたが、この『日刊臺灣日報』は、この新聞の起源、史料の改題、詳細な記事タイトル、本文の PDF から成っていて、とりわけ信頼に値するものとなっている。

『台南新報』は、

台南新報 大正 12 年から 13 年 91 ページ分。

台南新報 大正 13 年後半 1924 年、17 ページ。

台南新報 大正 13 (1924) 年、17 ページ分。

台南新報 大正 14 (1925) 年、8 ページ分、摂政宮訪問など、8 ページ分。

台南新報 大正 15 & 昭和 2 年 1926 & 1927、58 ページ。

台南新報 大正から昭和、77 ページ。

台南新報 昭和 5 年 (1930) 44 ページ。⁷

⁷ この収集は、台湾における高等商業学校設置の一端、総督府高等商業学校と、台南高等商業学校の並行と統合の経緯を確認するために開始されたので、その観点からの収集との傾向が色濃い。しかし、毎日のようにこの新聞を繰っていると、関東大震災とか、大正天皇の崩御などに目が行き、収集作業に集中できなかったこともあった。ここで読めなかったものは、その後高雄の師範大学で継続して閲覧を行った。○印は台南、□印は高雄での調査を示す。

臺 南 新 報		台北と臺南・高雄
大正 10 年	1921 年	○
大正 11 年	1922 年	○
大正 12 年	1923 年	○
大正 13 年	1924 年	○
大正 14 年	1925 年	○
大正 15 年 / 昭和元年	1926 年	○
昭和 2 年	1927 年	○
昭和 3 年	1928 年	○
昭和 4 年	1929 年	
昭和 5 年	1930 年	□
昭和 6 年	1931 年	□
昭和 7 年	1932 年	□
昭和 8 年	1933 年	□
昭和 9 年	1934 年	□
昭和 10 年	1935 年	□
昭和 11 年	1936 年	□
昭和 12 年	1937 年	□

『台湾日日新報』や『臺南新報』などの主要新聞が、日本に帰国後どの程度閲覧可能かを、いくつかの大学でチェックすると、当然のことながら地域によってバラツキがある。近隣の大学での所蔵状況をチェックしたが、必ずしも豊富ではないので、この機会に可能な限り収集しなければならない。⁸

大正 11 年の台南高商スタッフ、総督府商業専門学校と高等商業学校との関係などが散見された。この新聞は、昭和 12 年『台湾日報』と変更された。

⁸ この『台南新報』は、1937 年にその名を変更して、「台湾日報」となった。

4. 屏東ならびに高雄

奈良産業大学とは提携交流校となっている国立屏東科技大学は、その前身を旧日本統治時代の1924年に設置された州立農業補習学校に持っている。3月1日に訪問した際には、学長並びに図書館長の歓待を受け、学校の起源を熱心に説明された。

動植物園も所有して台湾一広大であると言われるこのキャンパスには、巨大な図書館があるが、図書館はその歴史を語るのか、草創期に収蔵されたと推測される日本語の文献も散見される。現在、管理、農学、工学、人文社会の4つの学院から構成され、私は最後の社会科学系、技職所というところに配属されたが、私の研究テーマが旧台北高等商業学校であったので、職業教育に関心を持ち、その研究していると解釈されたようであった。この大学は、日本で言う実業高校出身の学生が大学に進学する経路を引き受けているようで、普通高校から大学に進むのが常態となった日本とは少し異なる道を進んでいるようだった。同時に世界中からの留学生に溢れており、農業や工学といった母国に戻れば即座に需要が生ずるいわゆる「実学」を学ぶため、いや応なしに語学の習得が求められている。私は大学院生を対象のワークショップとやらされたが、別の場所での台湾の例に漏れず親日的で、学生との交流から少なからず学ぶところがあった。⁹

9 この学校の歴史を簡単に記すと、以下のようである。

1924年4月	高雄州立屏東農業補習学校として開校
1928年4月	高雄州立屏東農業補習学校と改称
1945年11月	台湾省立屏東農業職業学校と改称
1954年8月	別組織として台湾省立農業專科学校が開校
1959年5月	台湾省立屏東農業職業学校を台湾省立屏東高級農業職業学校と改称
1964年3月	台湾省立農業專科学校と台湾省立屏東高級農業職業学校を統合 台湾省立屏東農業專科学校として開校
1981年7月	国立屏東農業專科学校と改称
1991年7月	国立屏東技術学院と改称
1997年8月	国立屏東科技大学と改称

屏東科技大學では、偶然ながら土木工程系 教授兼主任 防災水資源工程研究所教授兼所長 丁澈士教授が以前から研究しておられる鳥居信平の二峰圳現地探訪とプレゼンをアレンジして頂いた。¹⁰

台北でも学位論文などの検索中、台北高商の研究論文と並んで、私の視野が拡大してきたことと善意に解釈したいが、李登輝総統就任以降の台湾で進展してきた「日治」時代の研究に目が行くようになった。最近の台湾では「日抛」と「日治」が区別されるようであるが、1895年以降、1945年の日本の敗戦までの時代に、日本が台湾開発のために、道路鉄道建設、都市計画、公衆衛生、教育などなど各方面にわたり、種々の施策を実施したが、例えば台南の烏山頭水庫などでも私たちが経験したように、10代の若い人たちの親日的な態度にも感じられたが、「日治」時代を虚心に観察する視角が生まれている。それは研究のみならず、教育分野にも拡大しつつあるようである。いわゆるインフラ建設に際して、日本がどのようなことを行ったか、そうした成果の評価が日の目を見つつある。私はとりわけ、都市計画・土木工学・公衆衛生・教育などの分野で顕著なものを見聞できた。

私の理解にバランスが取れているとは思えないが、台北では自来水（上水道）博物館、台南では烏山頭水庫、屏東では二峰圳の地下ダムなどが典型ではないかと思う。

台北市・思源路1号、台湾大学のすぐ近くにある自来水（水道）博物館には、1887年にスコットランドから来日して、日本各地の上下水道

10 日本人として最近鳥居に注目している平野久美子氏の『正論』掲載論文「台湾が愛した日本人…今蘇る「鳥居信平」伝説」のコピーや、「感動秘話 日本・台湾＝「水」の絆の物語 水利技師・鳥居信平の知られざる業績」などを頂戴した。旧台湾製糖の基地であった屏東の立地や、鳥居という人物の存在について知見を得る機会を与えて頂いたことに感謝したい。地下ダムまで降りて説明をして下さった丁教授とそのスタッフにも同様の謝意を表したい。

の建設に貢献し、1896年からは台湾に渡って、公衆衛生調査、台北・淡水・基隆・台南などの上下水道の整備に邁進した W.K. バルトン (William Kinnimond Burton 1856-1899) の研究にも、台湾と日本の研究者が努力を傾注していることを知った。¹¹

11 バルトン (パートン) は法律家で文筆家の父と、同じく法律家で裁判官の祖父を持つ母のもとに生まれ、高校卒業後エディンバラで水道技師の見習いになり、1879年に祖父の引き合いで、同郷エディンバラ出身のフリーミング・ジェンキンが設立したロンドンの衛生保護協会 (Sanitary Protection Association) で技師として働いた。大学教育は受けておらず、特段の実績もなかったが、渡欧中の永井久一郎 (永井荷風の父) と知り合い、彼の推薦を得て、当時コレラなどの流行病の対処に苦慮していた明治政府の内務省衛生局のお雇い外国人技師として1887年 (明治20年) に来日、衛生局のただ一人の顧問技師として東京市の上下水道取調主任に着任するとともに、帝国大学工科大学 (のちの東京大学工学部) で衛生工学の講座ももち、何人かの著名な上下水道技師を育てた。パートンの設計は、その後大幅に変更は加えられたいが、帝都上下水道の基本計画となり、東京、神戸、福岡、岡山などの上下水道の基本調査などを担当した。浅草・凌雲閣の基本設計者でもある。

また、パートンは母方の祖父が土地では名の知られた写真愛好家であったことから、カメラや写真に詳しく、当時の乾板の発明を行ったロンドンの写真技術者の一人として評価されたと言われる。その後、日本で写真撮影に関する本も出版した。日本の写真家小川一真らと親しい関係を結び、小川や鹿島清兵衛らについての論説をイギリスの写真誌に寄稿した。パートンは小川や鹿島のほか、菊池大麓、ウィリアム・スタージス・ビゲロー、石川巖、小倉俊司、中島精一、江崎礼二らとともに、1889年 (明治22年) 5月に榎本武揚を会長として設立された日本寫真會 (在留外国人や日本人富裕層のアマチュア写真家・職業写真師のための日本初の同好会) の創立メンバーとなった。1888年の磐梯山噴火、1891年の濃尾地震という大災害に際しては、大学の依頼で被災地に赴き、惨状を撮影した。

このパートンは、1896年、日清戦争の勝利の結果日本の領土となった台湾に向かい、台湾の公衆衛生向上のための調査にも従事した。台湾で良質の水源地を探索したが、調査中に病にかかり、1899年8月5日に43歳で没した。1894年に結婚した日本人妻との間にもうけた娘を伴って英国への帰国を準備していた目前であったため、帰国を果たせず、東京の青山霊園に葬られている。

その後2006年には、パートン生誕150周年を記念して、パートンの実家であり、現在はエディンバラ・ネイピア大学に寄付されているクレイグ・ハウス内に記念プレートが遺族によって設置された。プレートには、「日本という未開の国を工業国にしたスコットランドの偉人」といった内容の文言が刻まれている。

さらに、スコットランド出身の探偵小説家アーサー・コナン・ドイルは、幼少時にパートン家に預けられていたことがあり、ドイルとパートンは、パートンが来日した後も親交があった。ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズに、日本に関する正確な知識が登場するのは、パートンとの交流によるものだとされている。私見によると「技師の親指」*The Adventure of the Engineer's thumb*, 1889ではないかと推測している。ドイルは1890年に長編小説「ガードルストーン商会」をパートンに献呈している。

夏目漱石らに英語を教えたジェームズ・マードックとは同じ歳、同郷であった。

バルトン (パートン) の台湾での功績については、以下の論文がある。黄俊銘

<http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00044/1990/10-0163.pdf>

國家図書館で学位論文を検索閲覧したが、バルトン研究の呂哲奇論文「衛生工程顧問技師」は力作であった。

この人物については、すでに日本でもかなりの研究が積み重ねられているので、これ以上の詳細は省略する。¹²

すでに観光資源ともなって日本人もかなりの人が周知している、八田與一の烏山頭水庫については、私は省略したい。

次に、私が滞在した屏東科技大学に近い鳥居信平の地下ダムである。¹³

昨年日本でも上映された台湾映画『KANO1931 海の向こうの甲子園』には、永瀬正敏演ずる嘉義農林の野球部指導者や、大沢たかお演ずる八田與一が登場したが、台湾で現在最も人口に膾炙する日本人のひとりとは、鳥居信平である。

その鳥居の業績が私の滞在した屏東科技大学の近くにあった。それを専門に研究されたのは、何と屏東科技大学の丁先生であった。私は、2012年の滞在期間中に一度、同じ年の夏に当時の同僚山本英司さんともう一度と、あわせて二度にわたり地下ダムというアイディアを見学することができた。台湾各地には、旧日本が手を染めた各種の土木工事があって、いわゆる台湾社会のインフラ整備に貢献したと考える。

信平は1883年、周智郡山梨村（現在の袋井市上山梨）に生まれ、金

12 父ジョン・ヒル・パートン (John Hill Burton) は、福澤諭吉「西洋事情外編」の原著者であることが判明している。

母キャサリン (Katherine Innes Burton) は女性の教育、地位向上に貢献した人、叔母メアリー・パートンはA・コナン・ドイルを養育した教育者として知られる。ダニエル・スタシャワー / ジョン・レレンバーグ / チャールズ・フォーリー編 / 日暮雅通訳『コナン・ドイル書簡集』東洋書林、2012年。47ページ、222ページなどを参照。

13 平野久美子『水の奇跡を呼んだ男』産経新聞社 2009年を参照のこと。また以下の文献も参照されたい。渡辺・山本英司「2012年台湾林業調査報告」『奈良産業大学地域公共学総合研究所年報』3、2012年12月、119-136ページ。龍谷大学『里山学研究センター 年次報告書』2013年3月、87-88ページ。

沢の旧制4高、東京帝大農科大学で学び「台湾製糖」に入社。1914年、砂糖キビ栽培の任務で日本統治下の台湾に渡った。

台湾最南端の屏東（ピントンと聞こえる）県で21～23年、急流の川床にせきを埋め、苦難の末に伏流水を利用した地下ダムを建設した。ダムは周辺の環境を大きく変えることなく農業用水と飲料水を安定供給し、広大な荒地を豊かな大地にしたと言われる。科技大学からは車で数十分、私たちは乾季でほとんど水のない河原を見ながら、数メートル地下の水路に降り、地表面からは想像できないほどの良質な水量を確認し、周辺地域の水源として現在も大きな貢献をしている水道、鳥居の記念館などをまわることができた。車があれば半日コースだろうか。彼の出身地・静岡県袋井市では、台湾から贈呈された彼の胸像に、地元の人たちも驚嘆したそうで、彼の貢献が評価され始めたそうである。

屏東という地域で、旧台湾製糖の関連施設に触れることができたのは僥倖であったが、いまひとつ高雄から屏東に向かう列車が六塊厝の一手前の九曲堂駅を出た時に駅の傍に何かの碑が見えたのだが、それを記しておきたい。¹⁴

下淡水系鉄橋

高雄と屏東の境を流れる高屏溪は、「下淡水溪」と呼ばれていたが、屏東平原での砂糖の生産量の増加や、人や貨物の輸送の増加から、下淡水溪の架橋が急務とされ、1911年（明治44年）飯田豊二技師の設計による「下淡水溪鉄橋」が九曲堂駅と六塊厝駅の間に着工され、飯田の責任監督の下に工事が進められ、1913年（大正2年）の12月に竣工した。

14 片倉佳史『台湾に生きている「日本」』祥伝社、2009年。144ページ以下参照。

全長 1527 メートルで、当時の日本では最長の鉄橋であったと言われる。

しかし、飯田豊二は、工事期間中、寝食を忘れて仕事に没頭しつづけたことや、何度も見舞われた豪雨や増水の対処などによる疲労のために病に倒れ、1913 年 6 月、「下淡水溪鉄橋」の竣工を見ずに、台南病院で亡くなった。享年 40 歳。

同じく鉄道技師だった小山三郎は若すぎる飯田の逝去を悼み、九曲堂駅近くに、記念碑を建てて、その業績をプレートに刻んだと言われる。私が気がついたのはそれだったのだ。

屏東科技大学の技職所の皆さんにも大変世話になったが、大学図書館でインターライブラリを利用して、『台南新報』を高雄師範大学まで閲覧¹⁵に通ったり、台南市立図書館に出かけたりしたが、次の文献を記しておきたい。

『実業教育五十年史』 正統

この実業教育五十年史は 1934 年に文部省が発行した書物であるが、本文だけでも 288 ページのもので、大正時代の高等教育拡張期を踏まえて、実業教育の総括とその後の展望を目論んだものとみなされる。これに続編も加えると 850 ページにも及ぶ大部と成る。

台湾の図書館ではただ一箇所高雄に所蔵されているだけと把握しているが、偶然ながら、閲覧・複写することができた。これは日本でも容易に参照できるのであったが、日を改めて検討する必要性を感じている。¹⁶

15『台南新報』は 1923 年まで高雄で閲覧したが、関東大震災、皇太子＝後の昭和天皇の成婚、レーニンやトロツキーなどにも言及がなされ、時代を彷彿としてしまう。台湾には上記皇太子関係の訪問事跡が少なからずあるが、成功大学構内には、皇太子の植樹された樹木が立派に成長保存されている。

5. 再び台北

予想外に長く滞在することになった屏東を離れ、4月には台北に戻って、残された期間、フィールドワークから文献調査に転換した。主として旧台北高商＝現台湾大学社会科学院と、台湾大学総図書館最上階の特殊コレクションルームである。

何と言っても、帰国前の台北での収集は、台北高商が発行した、幾つかの学術雑誌、『台北高等商業学校一覧』各版¹⁷の閲覧と複写であった。

その主な部分は、台北高商の教員スタッフと学生の合同の所産である『南支南洋研究』、教員スタッフの発行した機関誌『南方経済』、いわゆる同窓会報にあたる『鵬翼』である。私の台湾滞在の成果の一部として「台北高等商業学校の商業教育について」があるが、これはこの3つの雑誌を分析したものである。¹⁸

南支南洋研究①－④⑩、1923－1943年。

南邦経済①－⑪、1933－1943年。

鵬翼①－②⑨、1922－1943年。

この3種の雑誌は、日本国内でも所蔵する機関はあるが、可能な限り現地台湾でなければ閲覧できないものを複写するように努めた。

16 同書・正統には、以下のような項目が記述されており、参考になると考えられる。商業学校、工学寮、高等専門商業、商業教育、大阪商業、高等商業、カリキュラム、高商の動向、東京高商、中等実業、大阪市立高商、東京商大付属商業学校、商科大学、商業教育、植民地、総督府商業学校、などなど。各種統計

17 大正12年、大正15年、昭和3年、昭和4年、昭和5年、昭和6年の所蔵を確認して、閲覧した。『一覧』昭和4年によると、カリキュラムが2本立てつまり、台南高商を受け入れたことが裏付けられる。

18 関西学院大学『経済学論究』67/1、2013年を参照。

台北高商卒業論文タイトル、32 枚。1458 点ほど、

『台湾総督府商業専門学校校友会会報』第壹號、大正 9 年 9 月刊、前文は加藤正生校長執筆。80 ページほどの物。

社会科学院で、大正 11 年のものとされる卒業名簿を入手した。私は、『鵬翼』に投稿した第 9 回卒業生の川柳作家を称する学生が同定できないかと考えたが、該当者は見つからなかった。

台湾大学の経済学の系譜史料として『従帝大到台大』を見つけた。そこには第二次世界大戦後アメリカに留学して、経済学教育を受けた 2 名の回顧録が収録されている。両者とも日本の旧帝國大学の教育を受けた後、アメリカに渡ったらしいから、戦前日本の教育とは断絶したのであろう。

台北高商のアルバムから	4 枚の写真
同	65 枚の写真
同	60 枚の写真
同	14 枚の写真
同	13 枚の写真

『台北高等商業学校開校 10 周年記念論集』台湾総督府高等商業学校、昭和 5 年 2 月 15 日、14 論文で 400 頁をこえる論文集。

『南支那及南洋情報』第 1 巻第 1 号～第 2 巻第 12 号—通巻第 1 号～第 16 号—（昭和 6 年 11 月～昭和 7 年 7 月）

昭和 6 年 11 月 1 日付の台湾時報発行所の前書きによると、本来この雑誌は、大正 9 年 1 月 31 日創刊の『外調週報』（総督府外事及調査両課

で刊行し、同年11月から『外事週報』と改題）に起源があり、その後大正10年6月18日から総督府調査課刊行の『統計週報』（大正9年10月1日創刊）と合併して『内外情報』と改題、更に昭和2年1月から現名『南支那及南洋情報』となり、昭和2年1月から昭和6年10月まで雑誌『台灣時報』の付録として継続してきたが、それから独立して、月2回（1日、15日）刊行の附録冊子となり、希望の向きに配布することとなった、とされている。

バインドされているものは、その後更に『南支南洋』と改称されて昭和16年7月まで存在しており、この種の雑誌の需要と、供給側の対応する力を想起させるものである。¹⁹

上記のもののように独立した冊子として収集したものではないが、シニカの図書館には、各種の人名辞典が所蔵されていて、今後教員リスト、学生名簿を積み上げてゆくに際して、参考にし得るものが少なくなかった。²⁰

6. 小括

以上、2012年の1月から4月末まで、台北、台南、屏東、高雄で収集した資料が散逸する前に、ここに記録することに努めた。2015年と比べると、暗中模索の感が強く、必ずしも系統だっていないし、無駄もありうるが、今後の作業の手がかりとしたい。

19 記事検索を実施して、昭和16年7月などに寄稿しているF.M. ファン・アスベック、M・ケルボッシュ、オーヴェルマン、レウイス・ファモール、C・J・M・クレツメル・デ・ウィルドと言った人たちが、対外関係の資源調査を行った報告が掲載されているが、その詳細がまだ明らかではない。

20 人名録、大衆人事録、大人名辞典、満州国名士録、大正人名辞典3.上、昭和人名辞典Ⅲ、大正人名辞典Ⅱ下、昭和人名辞典Ⅲなどなどが適宜利用できる。

